五井蘭洲『萬葉集詁』上（翻刻）

北谷幸册

【解説】

『萬葉集詁』は、江戸時代中期の儒学者五井蘭洲の著になる、萬葉集の難解な語句の注釈書である。

著者蘭洲は、一六九七年（元禄一〇）に大阪で生まれている。父親五井持軒（一六四一～一七二一）は、伊藤仁斎・貝原益軒らと親交のあった儒学者であった。蘭洲は名を純禎といい、冽庵・梅塢とも号した。懐徳堂の助教授（後に教授）として儒学・和学を講じ、『源語提要』・『古今通』・『新題和歌』・『勢語通』・『文章廻瀾』等々多数の著書がある。一七六二年（宝暦一二）三月十七日、六十六歳で没している。

『萬葉集詁』の成立は、一七五二年（宝暦二）、蘭洲五十六歳の時であった。『国書総目録』（岩波書店）が六巻三冊本の所在を伝えるほか、四冊四巻本（『国書解題』）・五冊本（「萬葉集研究書目解題」〔佐佐木信綱『萬葉集選釋』付録〕）・三冊本（佐佐木『萬葉集事典』）ともあって、冊数・巻数に相違がみられる。伝本稀で、前記『国書総目録』によれば、東京国立博物館と無窮会神習文庫所蔵の二本があるばかりである。

本稿が底本とした写本は、故吉永登博士旧蔵の三冊本で、更に旧蔵者を示す「香雲亭蔵」の印記がある。それぞれ縦約二一糎・横約一四糎、和装袋綴で、丁数及び分類は、次の通りである。

第一冊　萬葉集詁　上　全五七丁

凡例　天文時候一　地理宮室二　鬼神人倫支體三

第二冊　萬葉集詁　中　全四四丁

草木穀菜四　鳥獸蟲魚五　服食器財六

第三冊　萬葉集詁　下　全六二丁

態藝事為七　虚詞助辭八

翻刻にあたって、今回は上巻を採りあげ、順次中巻・下巻を対象とする。便宜上句読点を付し、漢字は一部新字体に改めた。全頁凡そ十一行に統一されているが、二段組とした紙面の都合上数行にわたった箇所がある。頁数は、「丁」で表記することとした。

なお、『萬葉集詁』について、拙稿に「『萬葉集詁』について―その方法論考察―」（『千里山文学論集』第29号・昭和58年12月）がある。

吉永本『萬葉集詁』（三冊）は、現在園田学園女子大学図書館吉永文庫に所蔵されている。今回の翻刻に際して再見の機会を得たことを付記し、感謝申しあげます。

【翻　刻】

萬葉集詁　一　二　三

（内扉題）

凡例

万葉集の哥、撰者のきくまゝに記されける故、皆〳〵よき哥といふにはあらす。拙きもありぬへし。文字に隠語のことくに用ひたることはにいたりてはとり用るにあらす。其昔いまのことくにかなといふものきはまらぬときは書記すこと皆漢文を用ゆ。よりて人に文字しらせんとて、其ころつゝといふに喚鶏、あきかせに金風なとをあて用ひて、もろこしの急就篇のこゝろにかきなせり。其中にいたりてわけのしりかたき有。これも其ころの人はさたまりたること故、よみもし、義もとれりと見ゆ。わさ〳〵とつくり出て書るにあらす。

（一オ）

後世かな遣ひといふ事昔はなし。よりて万葉集にはたゝくちにいふことくかけり。

詩、文章のあるはこの集の主とすることにあらされは必しもよむにたらす。詩は格法のあれは夫に随はれし故さのみあしからす。文章にいたりていつれもつたなし。末にいたりては在・有の二字をとりちかへたるほとのことなり。入道殿讀書給ふとあるは餘りにつたなけれは、後人の加筆ともいふへし。

かんなといへるはからな也。からなは漢字の事也。字の音をとりて吾国の言にあてはめたるを正議とす。あきかせのことし。字の訓をとりて吾国の言に引あはせるは

（一ウ）

変体なり。

後世の哥より見れは、てにはのちかひたる哥あまたなり。ちかひたるにあらす。元来いにしへに今のこときのてにはといふ事のなきゆへなり。其中には拙て上下呼応のもとれるもありぬへし。旋頭哥の讀法は、五七七五七七なり。長歌にいたりて一首中に長短の句法あり。例をおして見るへし。

いま、此躰をつくるとても諸国の哥のことはの珍らし

き、又助字なとは用ひましきことなり。

（二オ）

五井蘭州（ママ）先生纂述

目　次

天文時候一　地理宮室二　鬼神人倫支體三
草木穀菜四　鳥獣蟲魚五　服食器財六
態藝事爲七　虛詞助辭八　百七十枚

（二ウ）

天文時候

以　いまち月　あかしとつゝけたり。十八夜の月なり。
いやひにけに　いよ〳〵日にまさりてなり。
いかほかせ　いかほはかみつけの国也。いかほより
　吹風をいふ。
いまのをに　年の緒又をつゝの説あり。愚案には今
　の世になり。をつゝは現なり。
いあかす　居て夜のあくるなり。
いゆきはゝかり　いは発語なり。はゝかりてゆかぬ
　なり。山高きゆへ雲のかゝらぬをかくよめり。
いなのめ　しのゝめなり。あかつきをいへり。

（三オ）

波　はやみはま風　早き濱かせなり。
　はたれ　李花のちるを雪と見て、はたれの残りたる
　かと詠り。はたれとはかりにても雪になるなり。
仁　にはよくあらし　にはもしつけし、にはきよみとも
　つゝく。にはゝ海上の天気なり。をしなへては
　いはれす。
保　ほのめかし　朝霧のおほろなるをいへり。
ほろ　天雲をほろにふみあたしなる神とあり。見安
　云ほろ〳〵とふみわたしと云心也。愚案、雷神
　の雲をふみちらす心なり。ほろはは也。神代
　紀に淡雪のことくけはらゝかしと有心ならん。
　あたしもあらすなり。極ておそるへき様をいふ
　なり。

（三ウ）

止　とけしも　霜のとけたるなり。
ときしけめやも　時をわかぬ心なり。いつといふ事
　なく也。
と　時の略なり。恋しなぬとにと有。又一説とは内

なりと。しなぬ内になり。
とよはた雲　わたつみの豊旗雲と有。海上に旗のことくなるくもなり。
とのくもる夜　たなくもるなり。たなは上をいふ。
としのは　毎年也。宗祇云、年の初とみるときもありと。
としきはる　世とつゝけたり。
とよとし　豊年なり。
ときしみ　時となき也。又時しくとも有。不断の事也。

（四オ）

ときしくそ　ときしくに。平常也。いつもと云心也。
ともしつま　七夕の織女をいふ。あふ事のともしけれは也。
知ちよとことは　千とせをも常にかはらぬなり。
奴ぬは玉の月
遠をとしのさきつとし　契説をちとしのこゝろなり。竹取にもさをとゝしと云。
をち　明日といふかことし。

加をとつ日もきのふもけふも　一昨日昨日今日也。
をつゝ　今のをつゝと有。今みる現在の体なり。
かせをときしみ　吹へき時の風なり。
かゝみなす　望月をいふことはなり。なすは如くなり。
かせをいたみ　疾の字也。はやきといふ心。

（四ウ）

かせをたに　こふるとも、まつともつゝく。皆人の便風なり。
かせませり　雪はふりつゝとも、風交りとも。
かせはふる　浪とつゝく。風にてひるかへすなり。
かせまもり　海上にて風をまち合すなり。
かけろふ　かけろふの只人目見しと有。遊糸はちら〳〵みゆる故也。人をちらりと見しに用。
かはたれ時　暁也。彼は誰そとわかぬときなり。
かへるまの　帰る時の間といふなり。
与よこもり　夜をこめてのこゝろ。
ようへの雨　久方のようへとつゝく。ようへは昨夜也。

よはこもるらん　夜をこめてのこゝろなり。
よこきる雲　青山のよこきるとつゝく。

（五オ）

よこかせ　横風なり。
よなかのかた　夜半なり。
よのほとろ　夜中也。ろは助字。東方の方言。
よならへて　連夜なり。
よるはすから　通宵也。よもすからなり。
よくたちて　夜のふくる也。半夜より後は降ると云へし。
よあかし　舟は漕ゆかなとつゝく。夜明しの事也。
たなきりあひ　雪のふるけしきなり。
たまのを長き春日
たまきはる日　物の限りある事也。日も一日〳〵とかきるゆへにつゝけたり。又いく世へにけんとも有。

曽

そらみつやまと

（五ウ）

そらゆふ　見安云遊絲の事也。かくるといふ縁語也と。季云虚木綿と書はうつゆふとよみて内木綿とす。又し、そ通す。やはりしらゆふともいへり。
そくえのきはみ　雨雲のそくえとつゝく。見安云雲のはたて也。季云きはみは極りなり。雲の底天地の有かきりと也。愚案天雲なり。そくえは傍のこゝろ也。天の四方にある雲のはてなり。雨雲にはあらす。

津

つきよみ　光とつゝく。只月をいふ。月は日のうちにもみゆれとも、先は夜みる月の心か。昔の神人に月讃尊あり。
月に日にけに　毎月毎日なり。
月ひさに　月日のおほきなり。

（六オ）

つゆはら　露の多き所なり。
つかのま　かるかやのつかのまとつゝく。是は束ねたる間の短きなり。又、小鹿の角のつかのまとも。小鹿の角はみちかく手に握るほとのなかさなれはなり。

奈

なつかけ　夏の比の日陰をいふ。

なつまけて　さきたるはねすとつゝく。夏を待受て也。

なつのさかり　盛夏なり。

なくる日　和暖の日なり。

うつせみ　世の枕詞也。しかるを直に世のことに用。現在をいふなり。又かりの身とも、をしき此世ともつゝけたり。又うつせみしかみにたへねはとも有。

（六ウ）

うち日さす　都とつゝく。宮殿は高き故内へ日のさす也。

うちきらし　きらしはくもるなり。

うの花くたし　春されはうの花くたしとつゝく。卯の花をくさらす雨なり。卯花は三月にも咲へし。うの花をくたすなかめともあり。是は五月雨也。八雲御抄には春三月頃の雨の名とす。

うは玉のひましらみ　うは玉とのみにて夜の事なり。うは玉のねてのゆふへとも。

うらさふる心　こゝろの淋しき也。

うら〳〵　うらゝかなり。春日遅なり。

のし　たつのしと有。虹也。今も東国の人或は虹をのしといふ。

（七オ）

雲かくれ　なき行鳥とつゝく。雁の雲にかくれみえぬなり。大和路は雲かくれたりとも有。雲にてみえぬなり。尚態藝部に委しく記す。

くらやみ　暗夜なり。

久

雲ほこりて　雲のはひこるなり。

雲のなみ　雲を浪に見たてたるなり。

末

まきかくし　あられたはしりまきかくしと有。

まなかひ　永き日なり。まは真なり。

計

けさのあさけ　朝のかさね詞なり。

けさのころ〳〵　けは今日なり。けふの略といへり。

（七ウ）

今日の心といふなり。

不

ふゆこなり春さりくれは　季云冬木の姿なからはる来れはなり。契云冬木の実して春になり芽いつ

るなり。愚案冬木成と書、成は戌の誤り也。戌はまもるなり。もりと讀只冬こもりなり。

ふりなつむ　露霜とつゝく。ふりとゝまりつもる也。

己　このくれ　木の下やみといふに同じ。

こさめ　小雨なり。

このころ　比日と書り。日のつゝきならふ也。比の字をころとよむにあらす。

安　あたら世　新に宜しき世なり。新天子即位の年の所

（八オ）

にかくいへり。

あすか風　大和の飛鳥より吹風也。

あさつく夜

あをくも　青雲なり。

あかねさす　てれる月夜とも、ひるともつゝく。日色也。

あさくもり　朝に日の曇なり。

あさにけに　朝毎也。季云朝夕なり。

あさゝれは

あさなさな　あさな〳〵の略なり。

あら玉の年ふる

あけくれ　暁のまたくらきなり。

（八ウ）

あさなき　朝の天気のしつかなるなり。

あまさはり　雨にさへられて人の往来のなきなり。

あまつゝみ　雨にこもり居るなり。

あからひく　日もくれとつゝく。

あら玉の月　月のあらたまる也。又満月を玉に見なしていふか。

あさに日に　毎朝毎日也。

あさつく日　たゝ朝日也。つくは助字也。夕附日も同し。朝附夜は朝まて月のあるなり。

あきつけは　秋来れは也。

あちさはふ　夜とも昼ともつゝく。

（九オ）

雨はり　雨の晴也。季云、たゝ空のはるゝなり。

あまゝあけて　長雨のはれたる也。

あら玉の年

あか月やみ　夕月夜とつゝく。ゆふ月夜はかならす

あかつきやみなり。

あし引の山風

あさ東風

あまのしら雲　天にたな引白雲也。

あめの火　天火なり。

あたらしき年の初

あまそゝり　そゝりは通り也。立山の高くて天にとをり

（九ウ）

つゝくこゝろ。

あゆのかせ　東風なり。越中の方言。

あさゝらす　毎朝なり。

あさかれす　同右。

あまゝもおかす　雨の一日もやまぬなり。

あもり　つく天のかく山と有。天降と書。季云そゝりあへるといふことし。仙云あまくたりつくと云詞也と。しからは高き山ゆへ天もくたりて山につゝくといふこゝろならん。

あま雲のほろにふみあらし　ほろは原也。ふみあらしは踏渡也。契云古今集に天原ふみとゝろかし

（一〇オ）

なる神といふ類也。又天雲の餘所にみしなと有。季云よそといはん枕詞にて雲といふ也。

あは雪　しはすにはあは雪ふると。

あまゝあけて　見安云雨の晴たる間といへり。

あましるし　銀河をいふ。天にありて定れるしるしといふこゝろ也。

あまつゆしも　久方のあまつゆ霜と有。

あけされは　はなのさえたに夕されは藤のしけみと有。夜あくれはなり。

左

さよなか　夜半なり。さは発語。

さよふけぬとに　さは発語也。とには契云時に也。

（一〇ウ）

又東国の方言に内と云をいとゝ云。しからはいを略して夜のふけぬとにと云か。只内にのこゝろ也。

さゝらへ男　月の異名也。

さゝら野

起

きれる　春日のきれると有。霞也。又、きりあふ朝霞と有。但此霞は秋の哥に用たり。

きその夜　君そきその夜と有。仙云きのふの夜と云。

きのこのくれ　木の下やみに同し。

きえ行とし　あら玉の消行年と有。契云古事記にあら玉の月は消行と有。月日のすくるを霜雪の消るにくらへていへるなり。

（一一オ）

由

夕されは

夕つくひ　たゝゆふ日なり。

夕つくよ　よひ月夜なり。

夕こり　霜とつゝく。夕に霜のこりたる也。

雪しもの　只雪也。しものは助字也。

ゆふさらす　毎夕なり。

雪のなかれ　雪のふるをいふ。

ゆな〳〵　夜な〳〵なり。又ゆく〳〵なり。

みそら行　天を行雲なと也。

みか月の　まゆねかきと有。新月を眉にたとふ。

みつ　昔よりなかりしみつと有。祥瑞をいふなり。

（一一ウ）

是尊の和訓は唐の成文あるよりはしめてつくりたる訓なり。みつは古はみことなる事也。祥瑞にみつとはいはす。

みぬ日さまねみ　あふ日の久しくなき也。あはぬ日の久しきなり。

しくれ　久方の天の時雨又長月の時雨又しくれのあめともつゝく。

霜くもり　霜ふりて空くもる也。

しのゝめ　朝のいまたくらきなり。

しはす　十二月なり。

ひのたてひのぬき　日本紀にみえたり。たては東西ぬきは

（一二オ）

南北なり。

ひさかた

ひんかしの　五文字に用ゆ。東なり。

ひかた　吹らしと有。未申の風をいふと也。八雲の説なり。一説たつみとも。

ひなへ　比日と書。日ならへてとも。毎日なり。
ひさかたの月

（一二ウ）

地理宮室

以

いなみくにはら　播磨印南也。郡をくにとも云。
いその国より　不知の国と書。契云、只しらぬ国よりとよむへし。仙云磯のくになり。大和磯上郡也。これをくにともいふ。
いくり　石のことなり。
いつきの宮　わたらひのいつきの宮とも。
いはかきふち　岩のそひえて垣のことくなるにかくれたる渕なり。かけろふの岩垣渕、又たまきはる岩かきふちとも有。きはるは限るなり。垣に縁ある語か。又岩かき沼ともあり。

（一三オ）

いつへのかた　いつれの方なり。
いなか　なにはいなかといはれけめと有。
いはとたて　岩戸立也。季云、石庫をたつる也。
いはひへ　ものいみの家也。斎忌戸とも有。
いはやと　石室の門なり。
いさよふ浪　たゝよふなり。
いしはし　川中に石をならへてふみわたるを云。よりてまちかきとつゝけたり。必しも石にてつくれる橋のみにあらす。
いろつく山　朝に日にいろつく山と有。紅葉のあるやまなり。季云朝日にかゝやくといへり。

（一三ウ）

いかと〳〵　門々なり。いは発語也。
いとかはなみ　ちいさき浪なり。
いをしろを田　五百代御田なり。しろは二畝にあたる。
いるふち　いるは汭の字。
いつる湯　温泉也。あしからのといのか渕にいつるゆと有。
いはき　石城と書。墓なり。
いたふきの黒木のやね
いもかり　婦人の家なり。
いそまくら　石枕なり。

いたゝのはし　板はかり渡したる橋也。をはり田に詠。

いにしゑ　うつら鳴人のいにしゑと有。こゝは人の

（一四オ）

すまぬ家をいふ。人のいにさりし家といふ心か。

いてたちし　清き渚とつゝく。山川の形勢なり。

いそもと　海の磯の岩の根もと也。いそもとゆすり

たつなみとあり。

いもらかり　妹等がもとなり。

いつくしき国　たふとむ所なり。こと玉のさきはふ

国といふも神霊の国なり。

いはとかしは　吉野川いはとかしはとつゝく。

いはかまへつくれる墳　石にてつきあけたる墓な

り。これを石城ともいふ。

いたま　風ふきとつゝく。板の間より吹かせ也。

（一四ウ）

波

はにふ　すみ吉の岸のはにふと有。黄土也。又はね

ともいふ。ふは助字なり。

はまもせ　濱の表背也。庭もせの類也。

はまひ　濱邊なり。

はたけ　まきしはたけと有。陸田也。

はつお花いほりにふき

にはたつみ　にはかにたまる泉也。

にほへる山　朝日影匂へる山と有。

には　橘の下てるにはと有。橘の実の赤くて照る庭

也。

にゐむろ　新室也。

にゐはり　いまつくる道とつゝく。あらたに掘ると

いふ心。

（一五オ）

仁

ほた　秋の田のほたと有。穂のたれる田なり。

ほろ　原をいふ。

ほしの林

反

へのかた　ほとりの方也。いつへの方とも有。いつ

は何時也。又へつかたとも、へつへとも、あふ

みの海へたとも、へとはかりも用ゆ。いつれも

ほとりの心也。

登

とよあしはらみつほの国

とこつみかと　美の部に出す。

とをのみかと　とをは遠也。みかとは公館也。宰府をかくよめりとみゆ。契云、伊勢物語にわか帝六十餘国といへるみかとは吾朝といふ心なり。公館も朝といふへし。

（一五ウ）

又ひなの都といふも是也。新羅をもかくよめる所有。これは日本府あるゆへなり。大君のとをのみかととも。

とよくに　豊前也。愚案に豊国は九州の惣名ならん。神代のとよくむぬの尊は豊国主尊也。其ときは九州の君にてまし〳〵けるなり。

とこいは　たきのとこいはつねなると有。

とかけ　山のとかけと有。常の陰なる所也。

とこなめ　川のとこなめと有。水底の垢泥也。仙云、常になめらかなるいはほなり。

とまて　田のかり廬に苫にてかこふたる也と契云。

とをしろし　川とを白しと有。河の遠く大にして水色白く見ゆるなり。

とつ宮ところ　常にしてかはらぬ宮なり。

とこよのくに　季云、八雲に是より北の世界なり、とこよは只仙家をもいふへしといへり。わきも子はとこよの国に住けらし昔みしよりわかえましけり

とのと　屋外なり。こゝは池主か家持を貴ひて屋外につかへしこゝろなり。

千ちりひち　かすにもあらぬ吾とつゝく。ひちは土なり。

乎をしくに　しめのゝにと有。をす国とも。公領の国なり。

おほみかと　朝廷なり。みかとは御門なり。

おき　海にても河にてもとをき所をいふ。吉野の川のをきとあり。

（一六ウ）

をあらき　又おほあらきとも。大和也。荒廃するこゝろに云なせり。愚案におはるいきと云略語也。人の死ぬることなり。

（一六オ）

おしてるやなには　難波の枕詞也。おしてるなにはとも。おすは臨の字を用ゆ。なにはの都は高きより西海を臨んて照らすなり。

おほなは　大海なり。

おほみや　さす竹の大宮と有。さすはさゝ竹也。

おむかひ　峯のむかひなり。

おちたきちたる　瀬を早みおちたきちたると有。たきちたるはたきりたるなり。

（一七オ）

おかさきのおみたるみち

おほつち　大地のことなり。

おしへ　するかの海おしへとつゝく。

おてもこのも　あしからのおてもこのもと有。あなたもこなたもなり。をちの面こゝの面といふ也。

おもゝこのも　あなたこなた也。東国の方言也。

おかひ　岡辺なり。

おしてる宮　なにはの海おしてる宮と有。此句によれは古人のおしてる説は非なり。臨照の説ます〳〵證とすへし。

おきつかひへつかひ

おほとの　大殿なり。

（一七ウ）

おきまけて　沖かけて也。おきまえてとも有。懸てなり。

おきつき　墓也。息のつきたる人をうつむ故といふ。又おきは幽邃の義。つは助字。きは城にて玄堂なといふ心か。契沖はおくつきといふて解なし。又奥城と書り。凡きとは石をもてきつきたるをいふか。墓をいはきともおあらきともいふ。きの字皆同通なり。又、人の死するをいはかくれますといへり。おあらきは人の終ておるところなり。終る息との両説を存すへし。

和

わたなか　渡の中間なり。

わたつみのおきつ

（一八オ）

わたりの山

わきへ　吾家なり。

わかり　吾ところなり。

わしり出のつゝみ　家よりわしり出ると直にある堤也。

わたらひのいつきの宮　季云度会は伊勢内外宮のおはします郡の名。

かけとも　影の面なり。日本紀山陽日影面南なり。かけともものおほきみかと。

かしこきやま　岩たゝみかしこき山と有。さかしき山也。かしこきは恐るへきこゝろなり。

かくれの山　沖津藻のかくれの山と有。藻は沼にかくるゝ

（一八ウ）

ゆへなり。但名所ならんか。又かくれすむ[①]へき山なり。

かりみや　行宮なり。

かくれぬ　かくれてみえぬ沼なり。

かはよと　水のよとむ所なり。

かはとをしろし山しみかをし　山川のうるはしきなり。尚とを白しの所にも出。

かみのみかと　かみは上也。君也。君の朝をいふ。

加

かはと　河門也。川の入口なり。

かはのつかさ　川上なとを云。山のつかさ野つかさとも有。

かはなみ　川のつゝけるなり。

かり　ところ也。妹所をいもかりとよめり。

（一九オ）

かりはか　秋の田の吾かりはかのと有。契云、稲を苅場といふ事かと。

かひや　鹿を追ふ番小屋也。火をたきけふりを立る也。又山田守男のおくかひとも。

かきつ田　かみなひの清きみたやのかきつたと有。

かた　潟也。斥也。かたにあさりしと有。

かきつの谷　垣内の谷なり。ちかき谷をいふ。

かきほなす　人言又人のよこ言ともつゝく。垣は両家を隔るなり。両人の間をへたつる言なり。

かたきみかと　出入のかたき禁門なり。

かはすみ　厠のこと也と契云。

（一九ウ）

かきこし　垣越なり。かきをへたてゝなり。

よし野ゝくに　地壌の字を皆くにとよめり。今いふ国にはあらすたゝ土地といふこゝろ。

与

よみち　夜道を行なり。いはねふみ夜みちゆかしと有。又、四達の道をいへるも有。

よみ　とをつみちよみのさかひと有。冥途也。よみとはかりもいふ。よみは闇にてやみ也。

よきみち　よけるみち也。人の来往する時にわきへさくる道なり。

よすかの山　身をかくすへき山なり。

しかの山いたくなきりそあらおらかよすかの山とみつゝ忍はん

（二〇オ）

荒雄か死して其妻の悲しひ詠る哥なれはこゝのよすかはかたみの心によみたり。しかれとも死したる人の身をかくしよする所といふ心はおなし。

太

たにくゝ　谷水也。契沖は伝せす。又明に弁せす。

たむけの山　契云、旅行の初て山をこゆるに山神にたむけの祭りをす。山にもかきらす。奈良のたむけ山と詠り。逢坂山にも詠り。山上をたうけといふもたむけといふこゝろかといへり。たむけ山といふ一名にはあらす。

たゆたふ浪　たゝよふ浪なり。

たるみ　岩そゝくたるみと有。石にふれてなかれ下る水也。契云、津の国豊島郡にありと。

（二〇ウ）

たふせ　田盧也。田をもるふせ屋也。

たい　田い也。水のある田なり。しつくの田ゐとつゝく。地名なり。あかこまのはらはふ田ゐとも。深泥ゆへこまもはらはふと也。かならす井にはあらす。

たゝち　直にゆくみちなり。

たかみくら　天子黄幄の坐なり。

たゝか　いもかたゝかと有。季云寝床をいへり。

たみたるみち　まかりたる道也。此字多未足道と有。季云俊頼抄にをゝみあしちとよみておほく足はこふ道といへりと也。しかれとも仙云まかり道なりといへり。かたよからん人の声のなまるを

たむといふもおなし。平声

（二一オ）

にいふへきを去声にいへは声はまかりくねるなり。

たくつのゝしらき　契云たくふすましらきとも有。たくは白きなり。新羅をいはんとての枕詞也。愚案に、たくつのゝとは、つは助字、のは布、白き布といふ事か。季云、しらきのまくら詞也。白き角なりと。

たなはし　橋柱なきあやしき橋也。ひとつたなはしとも有。

そとも　日本紀山陰曰背面と。北なり。

そまかたの林　林の茂くして杣山のことをいへり。

そとものくに　畿外のくになり。

そかひ　山のそかひ。背面と書。契云うしろむきにみゆるなりと又さきたけのそかひともつゝく。

（二一ウ）

そめやかた　染屋形なり。黄染のやかたとも有。家を黄に染たる貴人の家なり。

そき　山のそき野のそきともつゝく。仙云そきは間也。山野の間なり。

つ　つちさへさけて　六月のつちさへさけてと有。

つゆはら　露のおほきなり。

つくるみち　にゐはりの今つくる道とつゝく。

つかさ　山のつかさ野のつかさともつゝく。季云、つかさはきはといふ心とも又つゝきともいふ心なり。

つま屋　枕つくつま屋とつゝく。まくらにをきつまある屋也。又枕つくは枕つらなる也。夫婦いねたる体なり。ゆへに

（二二オ）

つまやと云。仙云枕なれたる也。妻といはんためといへり。又わきも子とさねしつま屋と有。見安云妾を置所也と。季云妻のありし時ねしところ也。今按するにつまとはしをいふか。正寝にはあらてへやといふことし。仙説はつまを置たる家也。

まくらつくつま屋の内にとくらゆひすへてそ吾
かふ真白ふの鷹
これによれは妻を置へき所に鷹をかふへきにあらす。仙説杜撰也。いつれにもへ屋といふを叶へりとす。
なにはいなか
昔こそなにはいなかといはれけめ今は都とそなはりにけり
なはしろ水の中よと　苗代は水をなかさぬによりて中は
（二二ウ）
よとむなり。
なかのへ　宮中の外内をへたつる所也。
なこり　なにはかた塩干のなこりとつゝく。あとにのこりてうつ浪なり。
武
むかふす国　天雲のむかふす国と有。雲のたるゝ心にて遠国を云。
むかつを　向岡と書り。
むろう　ひのもとのむろふのけもゝと有。
むまや　赤駒のむま屋。
宇
うかはたて　鵜をはなつ所をまうくる也。
うちのみやこ　行宮也。こは助字也。古は上下通用す。
うちはし　かりに渡せる橋也。
（二三オ）
うみつ路　海路也。つは助字。
うちまうさき　契云、うちはのくまとよむへし。大和高市也。
うらくはし　浦のうるはしき景也。
うつしほ　うちよする潮也。季云、うつ巻潮也と、此説可なり。鳴門の哥なり。
うの花山　卯花のさける山なり。
うすらひ　さほ川に氷りわたれるうすらひと有。
うちの限り　たまきはるうちの限りと有。
うちさらし　濱邊をうちさらしとも、すみのえの岸のまつかねうちさらしともあり。浪のよりうつなり。
うなひ　海邊なり。

（二三ウ）

うらみ　磯のうらみと有。うらみはうらわと同し。

うつ田　季云、うつはほむる詞也。良田也。

乃

のほりせ　上の瀬なり。

野行山ゆき　足引の野行山行と有。野とつゝきたり。

野つかさ　つは助字也。野の上也。野の高平なるを

いふか。季云、つかさはつゝくこゝろ也と。

久

くたり瀬　しもつせといふへし。下の瀬也。

くにの都　恭仁と書。聖武帝のみやこ也。山城相良

郡也。

くにの鎮　其国の大山を国中のおさへしつめ鎮守と

す。尓雅にもとつきていへり。

くにのおくか

（二四オ）

雲のなみ　雲を浪にみたてたる也。

くにのはたて　さきたる桜と有。見安云、国のはて

まてといふ也と、又季云国のひろきなり。

くゝ里の宮　たかきたのくゝ里の宮。日本紀泳宮と

かく景行帝の行宮也。

くらたに　暗谷なり。

くぬち　国内也。青丹よしくぬちとつゝく。くぬち

は奈良の内の小名ならん。又越の海くぬちこと

〳〵とあり。季云、国土といふ事といへり。

くゆる　川岸なとの崩るゝ也。これをこゝろのくゆ

るにかけたり。

（二四ウ）

くにのまほら　国のもなか也。此哥の心はいつくへ

行ても王土也。王土にすむからはわかまゝに俗

を離るゝ事なるましき也。又、国のまほらは山

をしもさはにをゝみと有。季云、まほらは見安

云国の守り也。山は国の守りなれはなりといふ。

也

やすみしゝ　しゝは知り治むる也。又、しるともい

へり。

やまさゐいます

やちまた　八達の街也。たち花の陰ふむ道のやちま

たとあり。

やそくま　道のやそくまと有。曲折おほきみちなり。

やまとしま　あかしのとよりやまと嶋みゆとあり。

これは　（二五オ）

河内津国をもかねて云。又やまと路の嶋のうらわともあり。津国の海邊を広くさす。

やそうち河　ものゝふのやそうち川と有。ものゝふは武士なり。姓氏おほし故に八十氏と云。又もの丶ふのやそといはすして直にうちとつゝくるは必氏ある故なり。

やそみなと　おほき湊なり。近江にていふ。

やいつへ

やまもせ　山の面背也。表裏の心也。

やすのわたり　又やすの川とも。銀河の別名。

やまのつかさ　山の第一よろしき所をほむることは。

やら　仙云とろの事也と。長流云海底の泥也と。契云あら　（二五ウ）

と同し。海の事かといふ。

やまかい　山あひなり。

やまきえなりて　山のへたてさるなり。

やそ代　世のおほき也。八世也。

やつを　八峯也。峯のおほきなり。

やまひこのあひとよむ

やまさくら戸

やま川もよりてつかふる　山川鬼神も天子によりつかへる也。

やまからし　吉野の宮は山からし。

やをかゆくはま　遠路をいふは百日行濱と書。

やとをし　浪の声きくとつゝく。なこしといふかことし。　（二六オ）

やそくに　おほき国〳〵を云。やそくにはなにはにつとひと有。

やと　屋戸と書。家の戸をさすなゆめと也。有にはあらす。

まなこ　八百日行邊のまなこと有。砂也。

まけみそ　儲溝也。水をため置みそなり。

まとこし　窓をへたてゝ也。

まきいほ　まるくつくる家なり。

まはにの　さにつかはとあり。真赤土と書。しかれともたゝよきつちなり。さにといへるは赤きなり。

まいてまく　詣てまく也。廟にまいりたきなり。

まゝ　石橋のまゝに生たるかほ花と有。石橋はかならすはしならす。あさき川原に石をとひ〳〵に置てあゆみ行也。

（二六ウ）

其間〳〵にさける花也。これゆへ仙説かほ花をかきつはた也といへり。

まさか　采要云、寝所也。在所と同しと也。

けた　橋桁也。橋のこほれなはけたよりゆかんと有。

ふせや　まろやといふにおなし。

ふせいほ　ふせ屋に同し。ふせいほのまきいほの内と有。

ふるかきつ　古き垣内也。

ふせ屋もえ

こもり江　みつのさき浪をかしこみこもり江とつゝく。是は浪風をさけん為に入江をほりて舟を入るゝ所なり。

こゝしき山　岩かねのこゝしき山と有。こりしくといふ心。

（二七オ）

こち〳〵の国のさかひ

こもりつ　かくれたる所をいふ。仙云、かくれ水なり。

こしの中　越中也。

こしへ　越部也。三越の地をさす。

こなかと　小金門と書。門にはかなものある故也。季云、こかねとなり。金にてくさりたる戸なり。

えはやし　江邊の林なり。

あきつしまやまと

あをかきやま　四面青山の垣のことき也。又、たゝなはる青垣山とも有。かさなるこゝろなり。

ありねよしつしま　諸説分明ならす。愚案ありねといふ

（二七ウ）

②草木の根ありて有用の物なるへし。對馬にある故なり。青土よしの類なるへし。見安云、峯の面白き也と。

あめの海　天を海に見たてたるなり。

あられふるとをつ江　とは音也。あられふるおとゝつゝく。

あをはの山　水鳥の青羽、又青葉とも用ゆ。一云、名所にありと。

ありそへ　海邊なり。

あさゐて　水せきあくる為の堤也。あさは朝也。

あらたまのきえ　又、あら玉のすことも。遠江にあら玉郡あり。きえは地名也。こゝに寸戸とあるをすこと讀は誤りなり。寸をきとよみ、戸をへとよむは常のこと也。東哥にも此地名出たり。岐倍と書り。きえ人ともよめり、とこれ全

（二八オ）

契沖の確論なり。

あけ　契云、畠田也。高き所の田也。

あさ　さゝ浪こすあさとつゝく。水あさき瀬也。

あるみ　あらき海なり。

あさみや　朝に君の宮に出参するなり。ゆふ宮とも。

あら野　曠埜と書。かけろふのもゆるあら野とも。

あとひなみ立　青き浪たつなり。

あらやま　深山なり。

あさ野　雉子とつゝく。朝野也。

あし引のこのま　足引を直に山とせり。

あらかき　あみめの麁き垣なり。

（二八ウ）

あし火たくやのすゝたれと

あまはし　契云、二尊の立たまへる橋の事といへり。誤れり。これは羅公遠か故事を用ひて月宮にのほる天の階なり。

あしかきのくまと　芦垣の曲外也。

あらきの小田　墾田也。あらきはひらき也。新にこしらへたる田なり。

あらやま　荒僻の山なり。

あさ戸　朝戸なり。あさとまりと有。朝に戸をひらくなり。

左

さかと　坂門也。

さゝら　季云、此集月をさゝらへをのこと云。又あめにある

（二九オ）

③

さゝらの小野にちかやかりと有。天上の所の名也。下界のわさに准して天にも川野等をいふとあり。

さゝれ　さほ川のさゝれふみわたりと有。契云、さゝれは石の事也と、愚案小波也。浪にてもふむといへり。

さゝれ浪

さしなひし　国国の並へるなり。

さくぬ　かきつはたさく沼とあり。

さき田　辟田と有。しかれは新田也。又さきた川とも。

さなす板戸　さすなり。

さか屋　酒家なり。

さかふき　逆葺と書。尾花さかふきと有。やねふくに穂を下に

（二九ウ）

してふくをいふと也。

さくらと　山桜戸と有。八雲に桜の木の戸と有。又桜の木陰の家なり。

さかみ　峯のを峯。

きしのつかさ　季云、岸のつゝきなり。

起き　城也。塞也。障也。寇まもるをさへのきと有。愚案にきとは元来石をかさねたる也。寇をふせくところは必石をかさねて高うし敵の攻のほらぬやうにする也。つくしの名もつく石なるへし。凡石を重ねたるはいつ方にても城といふへし。人の居城に限らす。

由

ゆつはのむら　契云、ゆついはむらとよむへし。岩の多き

（三〇オ）

をいふ。ゆつはいをつの轉語なり。五百箇岩群なり。

ゆう川　晩の川なり。

ゆうはふる浪　晩にさはく浪なり。

ゆきしま　雪のつもれる嶋なり。
ゆきあひの坂　季云紀伊の名所なれとこゝはたゝいつくにても行逢たる坂といへり。
みつほなす　季云、水上の泡の玉のことくなるといへり。
みけつくに　御食の国也。天子供御のくになり。
みしふ　衣手のみしふつくまてと有。みさひをいふ。
みさこゐる　水砂也。鳥にはあらすと季説に八雲を引り。
みなあはさかまき　水泡さかまくなり。

（三〇ウ）

みちのしり　凡国の名に後の字あるを云。こゝは備後也。季云、常陸とす。
みちのなかて　今いふなはてなり。
みをつくし　こゝろをつくすと受たり。
みつほのくに　あしはらのみつほのくに。
みねのたをり　峯のまはりたるなり。
みやけのはら　うつくつのみやけのはらと有。日本紀には屯倉をみやけと讀。国々にあり。皇家をもいふ。定れる地名ならす。
みちのそらち　途中をいう。
みこしちのたむけ　契云、今のきのめ峠ならん。大山をこゆる

（三一オ）

時神にたむけてして無恙をいのるなり。たうけと云は只たむけならん。
みそのふ　御苑なり。
みをひき　水の深き所を道引なり。
みむろ　春日野にいつくみむろと有。遣唐使の海上無事をいのりて、春日山にて天地の神をまつる神室をたつるなり。
みつはな　水の出はなといふかことし。
みつかき　久しきとも又をとめらか袖ふる山のみつかきとも。水垣と書り。しかれとも瑞の字なり。
みさけん山　見つゝ遠さかる山也。

（三一ウ）

みやはしらふとしきます　又ふとしきしとも。又、神のまにふとしきますとも。いつれも天子の皇

見

居也。鬼神に限らす天子をさしても神といふなり。

みやま　御猟の山也。

みつやま　うねひ山也。ほむること葉也。

みちのくまわ　曲隈也。

みもろ　神の神杉と有。又みもろ山菅を詠り。又みもろをたてゝと有。神室也。社廟をたつる也。

又みわ山をも云。

みかと　とこつみことゝ有。かはらぬ宮殿といふこゝろなり。こゝは日並皇子の離宮をいへり。

しかれはみかとの詞は古は天子にかきらす。

（三二オ）

みわ山　神山と書。和州三輪山にかきらす。又みもろつくみわ山。

みつつたふいそ　水のつたひ来る磯なり。

みやち　官道なり。おほやけの道なり。

みつほのくに

みぬめ　水沼也。こゝをとしまともよむ。津国也。

又碕とも詠り。

みかほし山　かしこき山のともたちのみかほし山とつゝく。

みゆ　温泉なり。

みちのなかて　一すちに長き道なり。今はなはてといふ。

みしふ　水上にさひのことくうきたるなり。

みちのとゝみ　みちは潮のみちたる也。とゝみはとゝまるなり。

（三二ウ）

潮のたゝへなり。潮のとゝいともいへり。

みこし路　越前中後の壤地なり。

しめ野　猟のためにしめ置る野なり。

潮もかなひて　潮時のよきなり。

潮さゐ　潮のさしあふ所といへり。又浪の潮さゐとも有。愚案には潮の先か、今いふことはなり。

潮のさし来るはしめなり。

しつのいは屋　すくな彦名のいますとあり。

しらき　新羅也。たくつのゝしらきと有。枕ことは也。

しほひのなこり　潮のひてあとのひきし所にのこりたる也。

しのひ田　私田也。是は令にある口分田也。民のもちまへの田なり。

（三三オ）

したひやま　津国なり。したひとはかりは陰溝也。

しゝくしろよみ　よみは黄泉なり。

しは野　しは〳〵と云に受たり。芝の生する野か。

たゝしは名所か。

しゝ田　鹿のあらす田なり。

しま山　てれる橘と有。蓬萊をいふか。

しけちはしけ道　草木の茂き道也。は山しけ山のたくひのこと葉なり。

しきたへの家　又床ともつゝく。家の枕こと葉也。

しほけたつ　あらいそとつゝく。潮気の起るなり。

しき屋　醜屋也。いやしき家なり。

（三三ウ）

しからみちらし　鹿の萩をふみちらしなり。

しきますくに　すへろきのしきます国と有。治める小国なり。

したひ　下樋なり。池の下樋とつゝく。樋をうつみて池の下をとをすなり。

ひのみかと　日を天子に比して其都を云。みかとは御門のこゝろなり。

ひのもと　日本也。此こと葉こゝに初るひのもとのやまとのくにともあり。

ひこりて　氷るなり。

ひな　鄙なり。天垂るひな、又ひなのあら野とも詠り。

ひとへ山　所の名。長流云、只一重ある山と。

（三四オ）

ひたつち　乾土なり。

ひさかたのみやこ　帝都の長久を祝していふ。

ひやま　檜山也。丹生の檜山と有。

ひなさかる国　邊鄙の国なり。

ひたす河　契云、川の海へ入る所かと云、又潦川とかきてひたす川とよめり。しからは雨のたまり水の川水のことくなれるか。

ひのもとのむろふ　ひのもとゝいへるは口決也と季云。

ひとを　一の峯の尾さきなり。

ひなともしるく　越中の哥也。いなかと分明にしらるゝとなり。

ひなのみやこ　諸国の官府也。こゝは越中国府にての哥也。

（三四ウ）

ひのつまて　川子云、つまとかと。

もゝしき　大宮ともつゝく。

もゝくきね　三野とつゝく。百岫峯也。

もりへ　橘のもりへの家と有。もりへは大和の地名。たち花を守ると受たり。又、もりへすへとも。

もとをり　大殿のこのもとをりの雪なふみそねとあり。季云、もとをりはめくりといへり。

もとへ　山のふもと也。すえへと對していへり。

せかへ　川の瀬をかゆる也。季云、せきたる也。せきあへたる也。切語なり。たきつこゝろをせきとめたるなり。この説よし。

（三五オ）

せきのおすくろ　春山のせきのおすくろにわか菜つむ、この諸説いつれも分明ならす。

すそみ　すそ邊也。高圓の宮のすそみと有。

すみよしの里　住吉ならす。只すみ心よき里といふによめり。

（三五ウ）

鬼神人倫支體

いにしへのをうな　年ふりたる女也。をうなとはかりにても老媼のこと也。をんなとは別也。

いなたき　きすめる玉とつゝく。契云、いたゝきなり。

いも　家にあるいもと有。妻をいふ。又、実の妹をも云り。

いなひ妻　うらみとつゝく。吾をいとふつま也。

いゑひと　吾家内の人也。先は妻をさす。

いゑのこ　家の子なり。

いきのを　たまのをといふに同し。人のいのちを云。こゝは心の事なり。いきのをにおもへるわれを

とつゝく。是はいのちにかけての云なり。

いはけみ　幼身なり。

（三六オ）

いそのかみふるのみこと　契云、石上は物部氏にて饒速日命の後なり。故に尊ひてみことゝいふとなり。

いめたてゝ　いめ人なり。猟に獣の通ふ所に立てとらしむるなり。いめひとのふしみの田ゐとも。

いはひこ　にしきの中につゝめるいはひことつゝく。いはひいつくこゝろ也。斎児と書。

いきつかし　あないきつかしと有。苦しき心なり。

いろたへのこ　あからひくいろたへのことつゝく。紅顔をいふ。あかねさす君といふこゝろ也。

いもらかり　妹等許と書。

いもなね　つくりきせけん白たへのひもと有。妹が手なり。

（三六ウ）

いまし　汝也。今の人いましを誤りてすなはちと混す。

いのちさち　長壽也。

いはひつき　軽の社のいはひつきと有。槻の木を神体とする故なり。

いやひこの神　越後にいます神なり。

いかきもこえぬへし　神のいかきもこえぬへしと有。

波

はやひと　さつまとつゝく。もと隅薩より隼人を貢す。歌舞をなすもの也。又武勇の人をさつといふ故に隼人のさつと受る也。又名におふ夜声ともつゝく。是は大嘗会の時隼人司が犬吠をして開門の鳴声を発することをいふなり。

（三七オ）

はゝとじ　母也。とじは女の通称。

はつかりの使　長月のはつかりの使と有。蘇武が故事によりて使をいふ。

はなひ　まゆ根かきはなひとつゝく。嚔と書。はなひる也。

はしきこ　うるはしき人也。又美女をもさす。

丹

にほへるきみ　うるはしき君也。にほへるは必ず香

馥に限らず、色のよきをもいふなり。

にゐさきもり　西国へ異賊を今年ふせきに行なり。防人と書。皆東国の人の行ことなり。又今かはるにゐさきもりともつゝく。

にほのをもわ　丹穂なり。紅花なり。紅顔をいふなり。

（三七ウ）

にゐたまくら　わか草の新たまくらと有。

にこよか　顔色のわかやかにうるはしき也。

とをつま　遠方にある妻なり。

とも　ものゝふのやそとものをと有。季云、伴の男は臣下のこゝろ也。しかれとも又やそとものをは鵜川立けりと有。臣下たるものゝ鵜川にたつへきや。只多き男子をいふなるへし。八雲抄云やそとものをは朝につかふる男也とあるも伝しかたし。しかれは二様あるなり。伴と徒と也。おほくやなの鵜川に立なり。又うかひかともとも有。鵜をかふともからにて只徒の字也。

とりをしも　禽門に出。

（三八オ）

ともしつま　七夕織女を云。あふ事のともしけれは也。

とこゝろ　利心也。こゝろのたけくすゝみ早きなり。

とみ　獣人の職のことし。獣の足あとをみとむるあとみとも。

ときもり　うちなすつゝみとつゝく。十二時のつゝみをつかさとる人なり。

とねりこ　舎人也。ことりへとも。只とねり也。

とよきみ　大君と云かことし。

とをむまよひき　沖つ浪とをむまよひきと有。浪のとをよることき眉をひきとほむるなり。

とみひと　富人なり。

（三八ウ）

智ちはや人　うちとつゝく。宇治の枕詞也。路早き人といふ事と諸説あり。季云、別に正説あり。人是をしらすといへり。或人云、隼人と同し。

奴ぬすひと　ほれる穴とつゝく。盗なり。

ぬし　大人とも君とも卿とも書て、ぬし又はうしと

よむ。又のしとも云。こゝは大伴の池主か吾頭役の家持を貴んてぬしといへり。

ぬは玉のいも　契云大己貴命の哥に、ぬは玉のしろきみけしと有。しかれは物のうるはしきを褒る詞也。こゝもいもをほめたり。愚案に、ぬは、うはは、ほむる詞也。玉をほめてぬは玉と云。黒きまくらことはに處せす。

（三九オ）

くろきものも髪のみことなる故に、ぬはたまのかみといふなり。

おくの手　ひたりてのおくの手と有。重ね詞也。左手をいふ。

おひみ　老身なり。

おほまうちきみ　ものゝふのおほまうちきみと有。大臣の大将か。契云、是はものゝへとよむへし。盾をつかさとる一の氏なり。

をゝなね　女子なり。

おきつしま守　契云、是は海中の神なり。

おもふこの　家持より八束をさしておもふ子と詠り。

おもひつま　此哥は女より男をさしてかく詠り。

（三九ウ）

をみのこら　苧績の児等なり。幼き児女等なり。

をち　老翁なり。

をのかしゝ　をのれとちと云。又をのれかてにと云こゝろわかてに恋死せんとなり。

おもふとち　おもふ友とち也。思共と書。

おほきみのおほみ命

おひなみ　老身なり。おひな身にかゝる恋をも吾はするかも。

おもわ　面をいふ。

おみなたけお　臣の勇者也。

をはなち　小女のいまた笄せぬほとの髪也。はなちかみ也。

をくつま

（四〇オ）

おかみ　契云、日本紀竈也といふ。畢竟山神也。

おも　今云女こしもとの類ならんか。おもと人とも

いへり。爰におも求むらんと有を季云面きらひの事といへり誤りならん。こゝは乳母をさしていふ。君か乳を飲やらんおもをもとむるとたはふれていへり。又、たらちねのおものみことゝ有。おもは母のことをいへり。

面わすれ　人の面を見わするゝなり。

面かくれ　恥る模様なり。

おとこさひをとめさひ　男女らしき也。

をとめさひす　をとめらしきなり。

おきなさひ　老さひの詞、當部かみさひの所に委出す。

（四〇ウ）

おくてなる　手は袖よりおくは長く袖より前はみちかし、よりてこゝにおく手なる長き心と詠り。

おくの手といふこゝろ也。すへてをくれてあとにあるをいふ。晩稲をおくてといふもをくるゝ義ならんと契沖説なり。

和　わかせわかせこ　せの条下に委し。

わかせのきみ　婦より夫を指。

可　わきも子　又、わかまことの妹をさしていへる所有。

わきみ　わは発語也。君なり。

わし　汝なり。

わけ　吾身を卑下することはなり。

（四一オ）

わかこゝろつま　吾心中につまにせんとさためたる也。

わ　なをとわをと有。汝と吾と也。

わき草　腋下の毛也。

わかゆ　世人のわかく見ゆる也。昔みしよりわかえましけりとも。又、わかゝへりとも詠り。

わひ人　貧賤の人なり。

わひ人のあな心なと思ふらん秋の長夜を寝覚してのみ

かみかてわたる　わたつみのかみかてわたると有。長流云、わたつみは海神也。海を領する神なれはわたるをいはんとていへるなりと、分明なら す。契沖の説も不分明也。愚案にかては加ゆる也。海神のちからを

加へて海を無事にわたるならん。　（四一ウ）

かけ　人を恋ひゆきて影のことくなると詠り。こゝは朝影に吾身はなりぬと詠り。朝の日影は横にさす故人の顔ほそ長きなり。

かみぬし　神事を司る人なり。祝部也。

かとりをとめ　繪帛を織る女なり。

かくはしきみ　香はしき君也。ほむる言也。

かみをなこす　ちはやふる神をなこす。神に人の字を用ゆ。これはあらふる神也。なこすは和らくる也。

かき　大寺の餓鬼と有。めかきおかきとも有。一説に垣のことなりとあり。　④　（四二オ）

かみより板　契云、三輪の神体は杉也。板にもすれは云と。是にてはよりの字すます。もしくは神主神体にする板をいふか。季云、このかみのよりましには杉の板を立、神木の故也と。

かみの社にてる鏡

からひと　韓人なり。衣そむと云むらさきと有。

かみまつり　神集りなり。

かせくも　風雲と書。使人を云。風雲に言はかよへとつゝく。

かこのをとよひ　舟子ともの呼声也。水手をかこといふ。応神紀の故事。　（四二ウ）

かちとり　楫をとる舟人なり。

かみのもろふし

かみさひ　契云、さは助字也。神ひ也。翁さひをとめさひと同し。神ふり神たてをすると云心。愚案ひなひたりも同し。又、かみひてもと有。かみさひてに同し。わか身の老るなり。又、かみさふともあり。凡神に限らす人の老つかれたるなり。又、たゝふりたる事をもいふ。

かみのこと　きこゆるとつゝく。契云、雷をいふといへり。かみとはかりにて古の人雷とはせす。こゝの聞ゆるもかならすしも雷声とみすともおそれ

（四三オ）

たうとむ神のことく名の聞ゆるならんか。

与

よちこ　契云、やつこと同し。又、やつこをいとこともいふ。又、よつことも有。仙云、同しほとの女子等なり。

よゝむ　おひしたいてゝよゝむと有。よゝむは言の行つまりて云ひかたきなり。老て歯みなぬけて舌のみゆるなり。

よめ　夜目也。かすみを夜目にみるとあり。

よなき　態藝門に書たり。

田

たはらわ　童女なり。

たをやめ　手弱女也。女の通称。

たはれを　詩経、狂童といふことし。風流色を好む人なり。

（四三ウ）

たまつさの使の人

たらちねの母　又、たらちしや母ともつゝけたり。

たまもり　玉をあつかりてまもるもの也。

たまつさのいも　梓は良木ゆへ玉とほむる也。それをまた女子のうるはしきに比する也と季説。

たけを　武雄也。猛将をほむるなり。

たまかつま　顕昭云、妻をほむる詞也。一説玉のを に同し。又、一説王匣也。諸説分明ならす。季云、別に正説あり。口決といへり。又、かんさしと云説もあり。愚案に夫を比してほむる詞と。

（四四オ）

たまふれと　魂は朝夕にたまふれとゝ有。

たきつ心　山川のたきつ心。たけしくおもふ心也。

たつたひこ　竜田の神也。風神也。

たるひめ　垂姫とあり。たるひめにふちなみ咲てと有。

たからのこら　人の子供をほめていふなり。

たちから　手力なり。

たゝ　目に見けんとつゝく。直視をいふ。

たまちはふ　季云、童蒙抄云神のみたまの飛行して奇なるといへり。神とつゝきたり。諸説多し。

そ

そら　こゝろ也。こふるそらとあり。

そこゐの浦　そこゐは深きなり。うらは心也。深き

こゝろ也。

（四四ウ）

そつ彦まゆみ　器財門に出。

つ　つまのこ　わか草の其つまのこと有。

つるきたちをのかこゝろ　こゝろはなかに也。劔太刀に有物也。

つねひと　よのつね人なり。

つかさ　官長なり。

つくをり　形つくをりと有。形のくつをれ衰ふるなり。

祢　ねちけ人　佞人と書。哥の心にてみれは古にいふ口才ある人をいふ。善悪を顚倒していつれ操守なきなり。

奈　な　なをみれはと有。汝也。こゝは松の木をさす。

なには男　難波壮士と有。

（四五オ）

なせのみこと　はし向ふなせのみことゝ有。箸向と書り。ちかく手にとるこゝろ也。こゝのなせは弟をさす。みことはほむることはなり。

なをとのみこと　弟をさす。

なみたくましも　泪を目にふくむこゝろ也。

なあにのきみ　いとふるきなあにのきみと有。季云、解せすと、但太郎をいふか。

む　むなこ　むまこ也。孫の事也。うみの子と同し。

むらきも　心を云。こゝろの種々に生する故むらと云。

むつたまあへや　人の死するをむつたまと云。こゝは皇子を鏡山にほうむる故、かゝみによくあへと也。見安云むつ

（四五ウ）

字　ましきたましゐなりといふ。

うつそみのひと　現在の人なり。うつそみ、うつせみ、うちせみともに同し。又、うつそみと思ひし時なともつゝく。契云、此世の人にてありし時といふ心なり。又、うつせみの吾とも有。又、うつせみのいもとも有。是はほむる詞也。又、うつせみとはかりも有。現在の身をさす。又、うつせみし神にたへねはとあり。季云、うつせ

みは吾身をいへり。奥義抄云、蟬はもぬけてからを置てさるものなり。人もしかあれははかなきものにそへて人といはんとてうつせみと置なり。

うつのみて　人をうつくしむ詞也。天子の御手なり。

（四六オ）

うしはきいます　契沖は管見抄の説を用たり。うたかはし。季云、神の海中より出ること虫のわくかことしといへり。虫わくをうしはきと云。

うつくしつま　愛夫とあり。妻より夫をほめて云り。

うまひと　君子良家也。契云、こま人とよむへし。こま人は声ふくれたる故なり。よりて爰に肥人とかけり。愚案、狛の字の誤なり。

うちひと　宇治人なり。

うたひと　謡曲をうたふ人なり。

うかひかとも　鵜をつかふともからなり。

うしはく神　つくは山にいへり。

（四六ウ）

うつしこゝろ　ますらおのうつし心と有。はつきりとつよきこゝろなり。

うらもなく　死人の無心なるを云と季説。

うみの子　子孫なり。

のもり　野を守る人なり。

乃久せのわかこ　山城のくせのわかこ。

くはしつま　うるはしきつまなり。

くしのはゝ　久慈は地名。そこにある母なり。

くにつみかみの神さひて

くめのわかこ　日本紀第三道臣命の哥にもあり。見安云久米の若子、くめは姓也。若子は名也。愚案この義

（四七オ）

仙覚の注に随へり。誤也。くめのわかこ一人の御名にて姓なといふことにあらす。たゝしきことなから見あたらさるにや。口決別に注すといへり。已上季注なり。契沖はいかゝときしや覚束なし。

くひつき　うなひことつゝく。髪のさきの首筋につけるならん。

や　やたこら　契云、やつこらと云事か。見安云、やつはら也。

やからはらから　眷族兄弟と書。

やまたつ　本注今造木者むかへんきみとつゝく。猶器財門に委し。

やそとものをは　鵜川たちけりと有。ともは徒なり。

おほき人　（四七ウ）

数といふ心也。猶當部伴の条下考ふへし。

やそのいも　ものゝふのやそのいもと有。女子のおほきを云。

やははた　柔膚と書。女子の肌をいふ。

やちほこの神　大己貴命也。

やそのこゝろ　ものゝふのやその心とつゝく。色〳〵とおほくおもふこゝろなり。

やつこ　手にきりて打ともこりす恋のやつことあり。人にてもさしていふにあらす。せん方なさにこひをにくみて奴といひなすなり。

ま　ますらお　丈夫也。又ますらおとことも、又ますらおのことも、又ますらおのともともあり。（四八オ）

まうとめ　みやつかへする官女なり。

まなこ　愛児なり。母のまなこと有。

まつかひ　両家の事を通する使也。

まなかい　眼前なり。

またまて　上のまは真也。たまては玉手也。両の手と云事也。

ますらおの心　ふりおこしとつゝく。気節のこゝろを奮起するなり。

まゆねかき　みか月のまゆ根かきとつゝく。又眉の痒て搔にも云。眉を画かく也。月にたとふ。

まよひき　良本にまたひきと有は誤也と契云。日本紀睩此云、麻用弭枳。（四八ウ）

け　けむきわかむね　山霧にけむきわか胸と有。けむたき也。きりにむせふ也。恋の吾心をいたむるによせたり。

けしき心　吾おもはなくにと有。心の変せぬ也。し

かれはけしき心とはかりはかはりたる心也。

不

ふるひと　古の人なり。

ふときこゝろ　まきはしらふとき心と有。心のたしかなるなり。

ふりさけ髪　長流云、はなち髪とも。いまたゆはぬ髪なり。肩へふたつにかゝるなり。

ふりたるきみ　こゝにあはんと有。

己

こまひと　肥人と書。愚案、狛の字の誤りか。くはしくうま人の所にあり。

（四九オ）

こゝろくゝ　又心くきとも。心にあやしむなり。

こもりつま　しのひてこめ置妻なり。

ことよせつま　里人のことよせつまと有。人〳〵のおほくいひかくるゆへなり。

こひのやつこ　心のさたまらぬ也。やつこの所に委し。

こゝろと　只心なり。との字に義なし。

こゝろには火さへもえて　怒気の甚しきなり。

ことたま　契云、神霊をさしていふ。やそのちまたにゆふけとふと有。占は神の告を聞也。契云事のしるしなりと。但ことたまのたすくる国と日本をほめていふ也。天神地祇ことなる神霊といふこゝろなり。

（四九ウ）

天

てこな　まゝのてこなと有。契云、てこは人のつま也。女の名にあらす。凡吾ものにての字を用る、今の世もしかり。

てるさつ　てるはほむること葉。さつは薩男也。

てをよはみ　をとめとつゝく。

てにある　女子を吾ものにしたる也。吾手の内の女子といふこゝろ也。てこなと云に同し。てをなといふをてこなと轉したる也。

てもすま　態藝門。

阿

あつまをとめ　東女と書。あつまをうなともよむへし。

あまつひつき

あかきこゝろ　丹心也。かくさはぬあかき心と有。誠の心なり。

（五〇オ）

あすはの神　小柴さしと有。上総の国の神也。ところの風俗なり。一云、かまとの神也と有。火に庭中のあすはの神とつゝく。

あささゆひたれ　まゆふもてあさゝゆひたれと有。髪の結根なり。

あさかほなしみ　契云、あしたおもなみと讀へし。おもなみは面目なく恥かしきなり。

あちさほふ目

あま目　三津の海女と書。女のあまの事也。

あかのし　吾主也。わかきみと云に同し。のし、ぬし、うし皆貴ふことはなり。日本紀大人をも君をもうしと讀り。

あしろひと　あしろつくる人なり。

（五〇ウ）

あらふるかみ　又あらふる君とも有。吾につらくあたる人なり。

あさ臭はつる　よひにあひてあさかほはつると有。

あたひと　やなうちわたすあた人と有。季云、紀州の地名。

あらふるいも　吾にしたかはぬ女なり。

ありきぬのたからのこら　蟻衣の寶子等と書。

あすか男

あかねさす君　紅顔をいふ。

あねひと　天人也。天女と云ことく女子をほむることとは。

あこ　親しむ詞也。太后より清河をさす。清河は后の甥なり。吾子といふこゝろ。

あらし男　猟人なり。

（五一オ）

あこ　網子也。あみを引人也。あことゝなふるとあり。網引の人を呼そろゆるなり。

あもりつく　神とつゝく。

あれをはも　吾をはなり。

あさねかみ　祢は昨夜の事也。今朝の寝髪也。

あたもの　人はあたものと有。常ならぬをいふ。

あきつかみわかすへろき　明神也。帝をあかめていふなり。秋津の国の君、吾皇といふ心也。

あと見　狩の時禽獣の足跡を見る人也。跡人なり。

あをみつら　緑鬢といふことし。

あめのみかと　見安云、天智帝の御諱天命開別なる

（五一ウ）

ゆへあめのみかとゝいへり。あめの字のある御諱には天智帝に限らす。但此哥のは、女帝をいふならん。尊ひていふことはなり。

あろし　はしきよしけふのあろしと有。今日酒宴の家の主なり。ほめていへり。る、ろ通す。

あかもて　吾面なり。

あたし手まくら　おもふ人ならて他人の手まくらなり。

左

さひ　翁さひせんと有。老人めくなり。老人ふるなり。委く神さひの条に出す。

さかこゝろ　己之心と書り。つるきたちを受たり。其説分明ならす。

（五二オ）

さけにし胸　人をこひて苦しひて胸のさくると也。又わかむねはやふれて砕てともあり。

さきもり　九州の防人なり。猶にゐさきもりの条に出。

さはくみたみ　おほき民なり。

さにつらふをとめ　又いもとも、又わか大きみとも、又ひもともつゝく。季云ほむる詞也。さは助字、には丹土也。つらふは契沖云つゝ也。袖中云、にほふことなりと。

さすたへのこ　妻子をほめていふことは也。

さか父さか母　さかに己の字を用ゆ。わかちゝわかはゝといふことくみえたり。しかるに日本紀に性の字をさかと讀り。ほとゝきすの性は鶯に似ぬといふことか。

（五二ウ）

さつお　山のさつおとあり。賤男也。

さかこゝろ　さかは己か也。をのかこゝろ也。爰に景迹と有。かけと讀は誤り也。是をこゝろと讀。天武紀十一年八月にありと契沖云。

さゝきしわれや　いさきよきわれといふこゝろ。

きもむかひ　こゝろをいたみとつゝく。心のむかふ

起

也。凡一身五臓の神は皆心にむかふとあり。

きるかみ　女子八歳になれば髪あけとて末をきるなり。これをかみそきともいふ。

由　ゆみ男　弓雄と書。射手といふことし。

め　めつらしきひと　日本紀希客と書と季云。

（五三オ）

めのと　乳母也。契云、豊玉姫の故事より起りて妻の弟と云を略して乳母をめのとゝいふ。

めやつこ　いたきめやつこと有。いたきは至りて也。女奴なり。

めをほり　めは人の目なり。人の目をみるはたかひにみあはするなり。それをほりするとなり。

めのほる君　見まくほしき君也。

めつちこのまけ　めつちこは女稚児也。つは助字。まけは負の字なり。契云、是をとしと讀り。負の字を両にわけて貝を自とするなり。

美　みとりこ　嬰児也。かたみにおけるみとりこと有。

みこと　妹のみことゝ有。父のみこと、母のみこと、皆尊むことは也。

（五三ウ）

後世おことゝいふ。

みたから　御民と書。人民は天地のたからなり。

みつほなすかれる身　壮子と書。男さかりといふこと也。又水のさかりといふこゝろも有へし。

みそらゆく名　おしけくとあり。

みちもり　道を守る人なり。関守にも通すへし。

之　しきて　手のきたなきなり。

しまこゝろ　しまりたる心也。玉の緒をしむるとかけたり。

しらかおふ　白髪生ふ也。

しまつ　いせの海のあまのしまつと有。仙云、島人をいふ。

しきたへのこ　ほむる詞也。こは女子也。八雲云、いろたへとよめり。

（五四オ）

顔色の殊丹なるこゝろならん。

しこのますらお　しこは醜の字を書。字にかゝはらす只つよき事なり。又にくむこゝろにも用ゆ。

季注に、鬼の字を書ておにとよみ、袖中を引あしきときらへる詞と解す。

しれたる人　世中のしれたる人と有。天下の愚人と云心。

しつのこ　にゐむろのふむしつのこ。仙云、賤の子とみたり。いやしき者なり。季云、女の名かと。

しろたへの君　手まくらとつゝく。

しこつおきな　たふれたるしこつおきなと有。風顚漢の醜翁也。詈ることはなり。

しつおのとも　賤男のともから也。こゝは水手をさす。

（五四ウ）

しきたへの黒かみ

しわかきたりし　老人のしはのよるなり。

しかのすへかみ　筑前の神也。住吉同体といふ。

したへのつかひ　冥途のつかひ也と季云。

しのゝめ　人の目のほそき也。今俗に誤りてしつの目といふ。

しまもり　ことし行しまもりと有。島の番人也。さきもりとは別なり。

比ひしり　聖人なり。

ひまもり　うちぬらされとつゝく。

ひとたま　俗間にいへるゆうれいをいふか。ひとたまのさをなる君とあり。人玉の火は青し。さあを也。色の青さめたる

（五五オ）

人をさしていへり。

ひもろき　神なひにひもろきたてゝいはふと有。神代に叢祠と書。神の社の事也。

ひかるかみ　雷なり。愚案には電なり。

ひたひと　飛驛より出る大工なり。

ひときみ　人の君也。人君をさす。

ひとよつま　一夜中愛をしつま也。うかれつまにはあらす。契云、神楽哥に、

庭鳥はかけろとなきぬおきよ〳〵わかゝとよ妻久もこそみれ

かとよとはひとよ也。ひの字のかに誤れるならんと

（五五ウ）

いへり。愚案、日の字かとよむ例あまた有。誤れるにあらす。

母

もちをとこ

ものゝふのをみのたけを　武臣の勇猛なり。

もころを　如己男と書。

もとつ人　旧友或は前妻を云。又物をさして人とする例あり。ほとゝきすをかくよめる所も有。

もり部　守禦の人なり。こゝは関所の守りなり。人物に通していふ。たち花のもりへと有。橘の実を守るものなり。

世

せな　賤者の称。男女に通す。

（五六オ）

せこ　吾せこと有。額田王わか妻をさして云。しかれは是も男女に通す。又橘右大臣より對馬朝臣をさしてわかせこといへり。又男子としいふ哥あり。

せ　吾せと有。女子をさして云。又弟をさして兄よりわかせともいへり。

寸

すめろき　大王と書り。

すもり　みとりこのすもりと有。小児をもるもの也。すは賤むことはなり。

すめかみ　皇祖神也。神代の神にかきらす人代の帝王をも神といひなせり。

すかるのことき腰細　すかるは蜂也。こしのほそきものなり。

（五六ウ）

女子の細腰をたとへたり。

すめらみくさ　民くさといふことし。季云、師説に官軍の事をいふと。此説可なり。防人の哥なれは官軍となりてこゝに来りしと詠るなり。皇御軍なり。

する人　陶器をつくるひとなり。

（五七オ）

（『萬葉集詁』上、終わり）

注

①～④の四箇所に、それぞれ次のような朱の書きこみがある。

①　「名所伊セ」

②「私考有稲好シ對馬ハ田穀なき故外より送ル稲ならん」

③「私ニ園ヲサヽラガタトモ云ユヘ〳〵如此カタナリト又丸キモノヲ和ニ皿ト云小キ皿トシテサヽラ也月モ丸キモノニテ皿トシテサヽラヘト云ナリ」

④「私ニ云垣ト云説不可用雄餓鬼女餓鬼トアリコトニ其子ハラマンナドアリ」

（了）